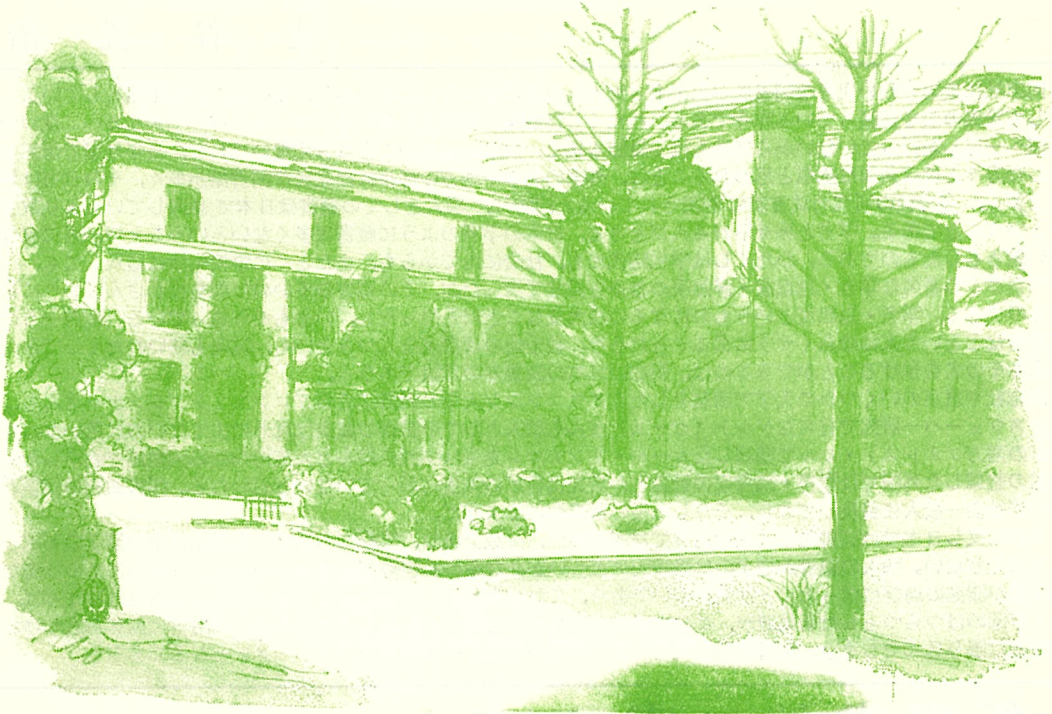


びふりおてか



同志社大学図書館報 No 15. 1974. 2. 1

新図書館軌道にのる

図書館長

遠藤

彰

新図書館の生みの親であった原正教授は、新館が落成して諸業務が軌道に乗ったのを見きわめて館長の職を辞された。その骨身を削るような御苦労と完成に当っての御満足を思いつつ、原前館長の御労苦に心からの感謝を捧げたい。もちろん、新図書館建設を立案し推進された元学長星名泰教授、同山本浩三教授、現学長松山義則教授、歴代図書館長をはじめ、全学あげての熱意と支持に対しても深甚の謝意を表さねばならない。またこの計画段階において協力を惜しまれなかった諸大学図書館当局の御好意を、私どもは長く忘れることができない。

12月開館いらい連日、1200の座席を有する各閲覧室は終日ほぼ満席状態を続け、1日の利用延人員は平均5,000に達する盛況である。また開館いらい学内の多くの方々から館運営の一層有効な方策について貴重な御提言をいただいているが、学内における図書館に対しての期待の大きさを思い、館員一同感謝しかつ責任の重さを痛感している。

大学の研究教育活動の充実のために図書館の果たすべき役割はもとより大きなものであるが、そのために適切な方策はどんどん開発し実施されるべきものであろう。館内サービス全般にわたり一層の創意が加えられるべきであろうし、約40万冊に上る各学部研究室・各研究所収蔵の書籍類との有機的相互利用や国会図書館や市内外の諸図書館との相互連繫の強化も積極的に検討される必要があろう。各学部設置科目や担当教授との連繫の緊密化によって、図書館は講義や演習に対して一層有効な奉仕をなしうることとなろうし、図書館学の充実や視聴覚教育の飛躍的發展も心がけるべきことであろう。

先年、エルサレムのヘブライ大学図書館を訪れて、その展示室で今世紀前半最大の考古学的発見の一つであった死海写本の一部を見たときの感激を、私は今でもまざまざと思い起す。図書館は学問に対する畏敬と感動とを、訪れる者にいつも与え続ける源であらねばならない。連日真摯に館内諸施設を利用している多くの教師学生諸氏の姿を見ながら、この図書館が大学の学的生命の重要な一源泉として作用しつつあることを思い、まことに心強い限りである。

(神学部教授)

図書館の利用と個人の蔵書

総 長
住 谷 悦 治

同志社に素晴らしい大きな図書館が出来上ったことは実に喜ばしいことであり、長い間の学園生活をしている一人として驚異の眼を見張っている昨今である。わたくしは1934（昭和9）年いらいヨーロッパとアメリカへ二度づつ、中国へ一度しか行っていないから経験も浅く見聞も狭く、口はばったいことは言えないけれど、長年外国で研究生活をした方々とほぼ共通な感想と思われることは、外国の大学や地方の都市には立派な図書館が多く、その蔵書は驚くほど多く、多方面の研究者読書家に利用されていると同時に、個人としての蔵書は日本で想像していたより数少ないということである。学者と称せられる人びとさえ、日本の学者のように蔵書は多くないということで、実に意外に思い驚きもしたものである。わたくしは学生時代にも、社会に出てからも、またとくに学校生活に這入っても、日本で相当多くの著名な学者・思想家・評論家の書齋を見せて貰ったが、その蔵書の多いのに腰を抜かさばかりに驚いたものである。学者・思想家というものになるのは大変なことだと思ったし、いままそう思っている。蔵書一万冊、二万冊などという人は恐らくザラにあることだろう。数千冊の蔵書家を入つき合いも、見聞も狭いわたくしでさえも何人もその名を挙げるができるのは、現在の日本の読書界の常識であろう。

同志社や東京のいくつかの大学で講義をしたウイスクンシン大学の経済学者のブロンフェンブレンナーさんも、マックスヴェーバー研究で有名なゲルト（ガース）さんも個人としての書齋の蔵書は意外にすくないのに驚いた。ロンドンの南方フォレスト・ヒルで聴講したカール・リンデマン先生は生涯を殆んど大英博物館の図書館で勉強した。図書館の整備した外国では学者・読書家の勉強とか研究は自家の蔵書に頼っていないと思われる。図書館利用は学者といわず社会一般人に普及しており、そうした長い習慣があるようだ。

これに反し日本では図書館も全国的にみて貧弱であり、少数であり、学校でも社会でも好学の士の勉強の要求を満たすに足りない。個人の蔵書が増すのは経済的に苦しいが止むを得ぬ趨勢であろう。いま同志社大学にこの壮麗な大図書館が開館の運びになったことは実に幸いであり、これが学園の人びとによって真に有益に利用されるならば、恐らく学園のはつらつとした新気運が、この図書館を中心として盛り上がることであろう。利用者に熱意が乏しければ図書館は眠り込んでしまう。図書館の充実と利用は学園の情熱と研究発展のパロメーターとなるであろう。

新図書館に寄せて

工 学 部 長
木 枝 燦

新しい立派な図書館が竣工したことを心からお祝いし、今後長い期間にわたってその機能が十二分に発揮されることを期待する。

歴史の示す通り図書館の発展は平和が維持されていることの強力な証拠である。先史時代の仮説的な大ウイグル帝国（正史に現われるウイグルではない）の首都に存在したナアカル図書館は数万の粘土板を蔵していたが、大洪水によって壊滅したといわれる。これは先史研究家の想像として論外であるが、メソポタミア（紀元前3000年）、ニネヴェ（前700年）、アテネ（前330年）等の図書館については今では遺跡出土品により往時をしのぶ外はない。前300年ごろ創設されたといわれるアレクサンドリア図書館は蔵書数50万ないし70万点をもち、丁度本学全体の蔵書数に匹敵するものを蔵していた古代最大の文庫であり、その司書エラストテネスは地球の大きさを計算したことで有名であるが、前47年シーザーとポンペイウスの戦いの犠牲となって惜しくも焼失した。

京都にも伝統ある古社寺などの保存する多くの文書がある。その一つであった冷泉院文庫は875年出火によって灰燼に帰してしまった。他方近衛家の文庫である陽明文庫は室町時代から記録に現われるが、応仁の乱には疎開によって難を免がれ、1675年の火災の際にも幸い守り抜かれたとのことである。現在は鳴滝宇多野にあって20万点の文書を蔵しているが、それらはまことに貴重な文化的遺産である。天災人災からこれらを守るのはわれわれの務めであり、各所の収蔵庫に分散する古文書を一堂に集めた大図書館が将来京都に建設されることも望ましいと思う。その意味から同志社に立派な建物の図書館が竣工したことはまことに喜ばしい。

しかしながら図書館の使命は蔵書が十分に活用されることであるのは言うまでもない。特に若い時代によく読むべきだということを強調したい。私の中学時代には小説を読むことは禁じられていたが、そのためかその時代にひそかに読んだ小説はよく覚えている。たとえば菊地寛の初期の作品に「出世」という好短篇があるが、舞台は上野図書館であって、当時の若い人達が上野や日比谷の蔵書をどんなによく利用していたかが伺われて面白い。われわれの図書館はエンサイクロペディア・アメリカナにも言及されている程であるから（日本の大学では他に東京、京都、慶応、早稲田の名が見える）、これを活用し発展させるのは同志社人の義務である。「出世」をもう一度読み返すため新図書館にはいったところ、中学生が何人か利用していたのでたいへんうれしく思った。西田幾太郎の日記に、「猫でござるを読む」という一行があるが、哲学者と文学者を猫がとりもつのはさておき、漱石も幾太郎も若い時には図書館をよく利用したことと思われる。漱石がロンドンで苦しみながら「文学論」ととり組んでいた時にも、下宿と図書館を何度も往復したことであろう。「吾輩は猫である」に出てくる立町老梅君は図書館を小用のためだけに利用する奇人であるが、漱石の文明批評的肉を乗り越えて、新図書館が真摯に利用されることを期待したい。

終りに立派な建物の建設に尽力された方々に感謝しお礼を申し上げる。

閲覧室の案内と利用

新しい図書館のオープンに相応して、利用上の規則、手続も変わりましたので主な点を紹介します。

なお別紙「同志社大学通信(竣工記念特集号)」 「利用案内」にも施設および利用について案内しておりますので、あわせてご覧下さい。

I. 同志社大学図書館図書利用内規

昭和48年12月1日制定・施行

第1条 (利用者) 同志社大学図書館(以下本館という)所蔵の図書は、同志社大学教職員、大学院学生、学部学生の利用に供する。

2 前項以外の者の利用については、別に定める。

第2条 (図書) 本内規にいう図書とは、単行書、叢書、新聞、雑誌等逐次刊行物、視聴覚資料等本館に所蔵するすべての資料をいう。

第3条 (休館日) 本館の休館日は、次のとおりとする。

- (1) 日曜日
- (2) 国民の祝日
- (3) 国民の祝日が日曜日にあたる場合は、その翌日
- (4) 創立記念日(11月29日)
- (5) 基督降誕祭(12月25日)
- (6) 春、夏、冬休暇中の一定期間
- (7) 毎月末日(休日のときはその前日)

ただし、必要あるときは、臨時に開館または休館することがある。

第4条 (利用時間) 利用時間は、通常9時から21時までとし、各閲覧室の利用及び業務取扱いは別に定める。

ただし、必要あるときは、臨時に変更することがある。

第5条 (利用手続) 図書の利用には、所定の手続をしなければならない。

第6条 (館内閲覧冊数) 同時に閲覧できる冊数は、次のとおりとする。

閉架図書	5冊
開架図書	2冊
展示雑誌	2冊
参考図書	3冊

ただし、必要あるときは、その冊数を制限することがある。

第7条 (館外貸出冊数) 館外貸出図書の冊数及び期間は、次のとおりとする。

1. 教 員 12冊 3カ月以内
2. 職 員 12冊 1カ月以内
3. 大学院学生 5冊 2週間以内
4. 学部学生 4冊 1週間以内

ただし、開架図書は、教員、職員、大学院学生について4冊、2週間以内とする。また、必要あるときは、上記の冊数及び期間を変更することがある。

第8条 (延滞処置) 延滞処置については、次のとおりとする。

(1) 短期延滞

短期延滞とは、貸出図書の返却期日後1カ月以内の延滞のある場合をいう。

短期延滞が3回に及ぶときは、返却のあった日より10日間館外貸出をしない。

(2) 長期延滞

長期延滞とは、貸出図書の返却期日後1カ月以上の延滞のある場合をいう。

長期延滞の場合は、返却のあった日より3カ月間、館外貸出をしない。

第9条 (禁帯出図書) 貴重室図書、同志社資料室図書、参考図書、新聞、雑誌等逐次刊行物及び特に指定した図書は、館長が許可した場合を除き館外貸出をしない。

第10条 (紛失・損傷処置) 図書を紛失、損傷したときは、原則として同一の図書をもって弁償するものとする。図書により弁償できない場合は、別に定める相当の金額の弁償をするものとする。弁償の終わらない間は、館長が許可した場合を除き館外貸出をしない。

第11条 (閉架書庫への入庫) 入庫できる者は、次のとおりとする。

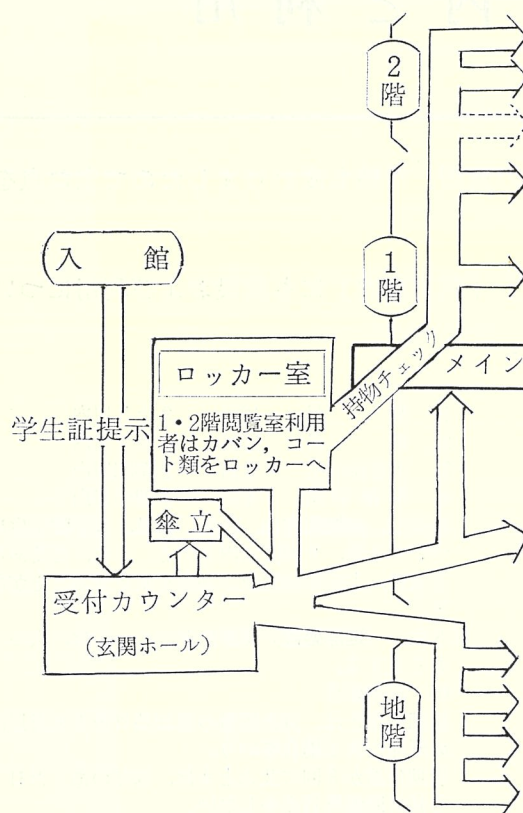
- (イ) 教職員
- (ロ) 大学院博士課程学生
- (ハ) その他、館長の許可した者

2 入庫を希望する者は所定の手続をしなければならない。

第12条 (携帯品、所持品) 閉架書庫及び開架式の閲覧室等に入るときは、オーバーコート、カバン、バック等を着用し、または携帯することはできない。

Ⅱ． 閱 覧 室 の 案 内 （Ⅰ.同志社大学図書館図書利用内規，Ⅲ.利用上の主な注意事項 を参照して下さい。）

室 名	特 徴（蔵書の構成，その他）	開 室 時 間 (通 常)
第 2 閱 覧 室	第3閲覧室とともに1階の各閲覧室の延長として設けられ，中庭に面し，落ち着いた雰囲気の閲覧室。	10:00 ～20:00
第 3 閱 覧 室	一般の閲覧机とは異なり，各席とも三方が仕切られていて，照明器具の覆が小棚としても使えるように工夫された個席閲覧室。利用希望者はメインカウンターで申し込む受付制。	
AV室・第1～4オーディオ室・マイクロリーダー室	開室準備中。整備でき次第順次開室。時期・利用方法などはその都度掲示。	
開 架 閱 覧 室	一般の勉学は，この閲覧室と雑誌・参考図書室の図書でおよそ充足できるよう配慮されています。利用者が直接書架から本を取り出して利用できます。閉架図書，参考図書以外の過去約10年間に受入れた図書，岩波文庫，学部文庫（文・法・経済学部）など約50,000冊で構成。	10:00 ～21:00
雑 誌・参考図書室	レファレンスカウンター 図書資料の探し方，使い方および目録のひき方など判らないときは係員（不在のときはメインカウンター係員）が質問を受け付けます。	
<参 考 図 書>	百科事典，各種専門事典，各国語辞典，年鑑，統計書，白書，便覧，人名事典，地名辞典，地図，書誌・索引，加除式の法令集・判例集，J I S（日本工業規格）など。開架式（室外への持出しは不可）	
<雑 誌>	利用の多い一般雑誌と学術雑誌の新作雑誌を展示。開架式（室外への持出しは不可） 既刊号（バックナンバー）およびそのほかの所蔵する雑誌，新聞の請求はメインカウンターへ。	
閉架図書（書庫に収納されている図書）	1階・2階各閲覧室利用者の持物チェック（持ち込めるものは，図書（雑誌を含む）3冊以内と筆記具） 図書の貸出・返却，図書館外貸出証の発行，文献複写申込，第3閲覧室利用受付など一切の業務を受付（「カウンター業務取扱時間」の項を参照） (イ)美術書（主に図版，絵画）(ロ)資料類（府県史，地誌，諸統計，法令集・判例集etc）(ハ)地図類(ニ)個人全集（特殊資料的なもの）(ホ)報告書(ヘ)会議録(ト)復刻版などの新刊図書および旧目録図書の全部。	
目 録 コ ー ナ ー	新目録（昭和39年4月以降受入れた図書＝開架・参考図書も含まれている），旧目録（昭和39年3月以前に受入れた図書），雑誌・新聞目録（新・旧）を備付。 開架・参考図書（いずれも新目録）以外の請求はメインカウンターへ。 目録（カード）の左側に記載されている下記の事項（1～2）は無視して下さい。 1. 自由閲覧室 この図書は出納台では請求できません。 2. 参考図書室 この図書は参考図書室で見てください。ただし逐次刊行物は最新号のみ。 開架閲覧室には自由閲覧室，雑誌・参考図書室には参考図書室と目録（カード）に表示されているもののほかにも多くの図書が置かれています。	
新 聞 コ ー ナ ー	朝日，京都，毎日，日経，サンケイ，読売の京都版と Mainichi Daily News，日経産業の当日の各新聞を展示。そのほか同志社学生新聞，早稲田大学新聞，日本読書新聞などを随時展示。	9:00 ～20:00
第 1 読 書 室	閲覧机は遮蔽板で区切られ自習に最適。	
第 2 読 書 室	ロビー風のくつろいだ雰囲気の閲覧室で，グループの研究資料作成などに活用すると便利。	
第 1 閱 覧 室	一部二層になっていて第1読書室と同じように自習に適しています。通常地階より出入りできますが，試験期など図書の利用が激しくなる期間は，メインカウンターで持物チェックを受けて1階より出入りすることもあります。	



Ⅲ． 利用上の主な注意事項

〔入 館 手 続〕

玄関ホールに入って左側の受付カウンター係員に学生証を提出すれば利用することができます。

〔1階・2階閲覧室への入室〕 開架閲覧室，雑誌・参考図書室，第2・第3閲覧室等

- ・持ち込める図書（雑誌を含む）は3冊以内。メインカウンターで冊数表示のしおりを渡します。筆記具，ノート類の持ち込みは自由ですが，係員に持物を見せて下さい。
- ・その他のカバン，コート類は，ロッカーへ入れて下さい。

なお，図書館を利用するときは，大きな所持品を預かる場所がありませんので，ロッカーに入る大きさの所持品だけにして下さい。

ロッカーの使用

- ・使用できるのは，1階・2階閲覧室の利用者に限

ります。

- ・ロッカーの数に限りがありますのでグループで利用される場合は，できるだけ共同で使用して下さい。
- ・ロッカーには現金や貴重品は入れないようにして下さい。
- ・鍵は各自で責任を持って所持し，館外への持ち出しはしないで下さい。万一，鍵を紛失したときは直ちに届け出て下さい。見つからない場合は，相当の弁償金を徴収します。
- ・ロッカー内部を点検しますので，携帯品は，必ず持ち帰って下さい。

〔傘 立 の 使 用〕

- ・傘立を使用できるのは開館時間中だけに限ります。
- 使用上の注意は， ロッカー使用の場合と同じです。

〔館内閲覧図書の返却〕

開 架 閱 覧 室——使用済の図書は，「返却棚」に返却して下さい。

雑誌・参考図書室——展示雑誌および参考図書は，元の位置に必ず戻して下さい。

閉 架 図 書——閉架図書を館内閲覧のまま，無断で図書を館外へ持ち出すことはできません。閉館までに返却して下さい。

〔第3閲覧室の利用〕

利用希望者はメインカウンターへ申し込んで下さい。学生証と引き換えに座席利用証を兼ねた「座席番号章」を渡します。これを身につけて指定番号の座席を利用して下さい。

〔カウンター業務取扱時間〕

通常 10:00～20:45 ただし，下記の時間は，各

々の業務の取扱いを停止します。

11:30～12:30（土曜日は，12:00～13:00）

図書請求，館外貸出，文献複写受付 停止

17:00～18:00

図書請求，文献複写受付 停止

20:00 以後

文献複写受付 停止

20:30 以後

図書請求受付 停止

20:45 以後

館外貸出等一切のカウンター業務 停止

〔文献複写サービス〕

- ・複写する文献は，図書館所蔵の図書，雑誌その他の資料に限ります。
- ・所定の申込書に記入し，複写資料（必要とするページの初めと終りに小紙片をはさむ）とともにメインカウンターへ申し込んで下さい。
- ・料金は，B4 1枚 30円です。引き渡しの際に複

写枚数4枚までは証紙（5枚以上の場合は、出納課納入通知票）と引換証を提出して下さい。既納の料金は、お返しできません。

	受付時間	できあがり予定時間
第1回	10:00～11:30	13:30以後
第2回	12:30～13:30	14:30以後
第3回	13:30～15:00	16:00以後
第4回	15:00～17:00	翌日 10:30以後
第5回	18:00～20:00	

ただし、土曜日は第1回受付分のみ当日お渡しいたします。

なお、試験期など、申込者、申込枚数の多いときはできあがり予定時間より遅れることがあります。

〔図書館外貸出証の再発行〕

図書を紛失したときは、もちろんのこと、貸出証を紛失したときも直ちに届け出て下さい。貸出証の再発行は、1週間後に行います。

〔その他〕

- 閲覧室、通路、玄関ホール付近では、私語談笑など慎んで下さい。

- 机上照明のある閲覧机を使用したあと必ず消灯の上退室して下さい。

- 下駄、サンダル履での入館はできません。

- 喫煙は、所定の場所に限ります。また、館内での飲食は一切禁止されています。

- カーテンの開閉の必要なときはメインカウンターの係員に連絡して下さい。

- 非常、緊急の場合は、館内各室にインターホン、非常ベルを設置していますので使用して下さい。放送その他の方法で係員が指示、または処置いたします。

- 図書館の建物、施設には、一切の貼紙落書を禁じます。

図書館の図書、施設は、公共物でありますから、規則をまもり、大切に取扱いして下さい。また、館内では係員、掲示の指示に従って下さい。

なお、開館時間、各閲覧室の利用時間、利用冊数及び期間など臨時に変更することがありますので、図書館の各種掲示、案内に注意して下さい。わからないことは遠慮なく係員に尋ねて下さい。

「新図書館建設にいたるまでの 諸種の事情について」

閲覧課長

前 川 嘉 門

新図書館建設にいたる道は、長い道程であった。その長い道程の中には、いろいろのことがあったが、そのなかのいくつかの事柄についてふれてみたい。

<1> 検討体制について

昭和38年に Vories による最初の設計案がだされて以来、昭和41年、42年と幾多の設計案乃至は試案がだされたがいずれも具現化にはいたらなかった。「幻の図書館」ともいわれたこともあったやに聞いている。

そのような状況の中で、なんととしてでも新図書館を建設せねばとのねばり強い、精力的な努力が続けられ、昭和44年4月には、図書館内に新図書館建築実行委員会が設けられ、新しい大学図書館の建設と改革に着手されることとなった。

まず、問題点をどのようにとらまえ、整理し、検討をしてゆくかが、最初に与えられた大きな課題であった。新図書館建築実行委員会としては、全学的地盤に立って、学生、教職員利用者の立場で、図書館員の経験と知識を活用して、新図書館建築に関する諸問題として、つぎのようにとりまとめた。

1. 大学図書館の在り方
2. 図書館業務改善の問題
 - ① 実務の能率化と合理化に関する問題
 - ② 図書館サービスの強化に関する問題（レファレンスサービス、書誌的サービス、AV関係他）

- ③ 収書業務の強化に関する問題
- ④ 機械化に関する問題
- ⑤ 2部の問題
- ⑥ その他
- 3. 組織の問題
- 4. 基本設計, 実施設計関係の問題
- 5. 設計条件の問題
- 6. 施設の問題
- 7. 設備の問題
- 8. 調度, 備品の問題
- 9. 管理の問題
- 10. 図書配置, 移転計画の問題
- 11. その他

上記の諸問題をふまえて, 新図書館建築実行委員会の下部組織として, 6つの主題別プロジェクトチームを編成し, それぞれの主題別に検討を開始したのである。

プロジェクトチームの名称と検討項目は次の通りである。

- 第1グループ(庶務, 整理, 閲覧関係)
- 第2グループ(雑誌, AV, パンフレット等の関係)
- 第3グループ(収書, 主題別関係)
- 第4グループ(2部関係)
- 第5グループ(サービス強化関係)
- 第6グループ(施設, 設備, 調度関係)

新図書館建築実行委員会は, 各グループの意見調整並びに決定機関としての役割を持ち, 各グループとの有機的関連を計った。グループにも属さないような特定主題については, 実行委員会に於いて, 専門小委員会, 合同グループ会議等を適宜, 委嘱し, 検討を行なってきた。専門小委員会, 合同グループ会議等の名称は, 次の通りであった。

<専門小委員会>

将来計画小委員会・組織問題小委員会・文献複写小委員会・図書運営協議会小委員会・件名問題小委員会・書架目録小委員会・新町読書室問題小委員会・編成係の位置付に伴う問題検討小委員会・自由閲覧室問題小委員会・開架コーナー分類統一小委員会・福利厚生問題小委員会・自習専用室に関する小委員会・書庫調査問題小委員会・情報管理小委員会・新町読書室図書切替実施に関する小委員会・新会計基準実施に伴う図書管理検討小委員会・除籍問題検討小委員会・所蔵表示小委員会・移転計画小委員会・館内掲示検討小委員会・学部文庫検討小委員会・その他

<合同グループ会議>

- 第2・第5グループ合同会議(雑誌係とレファレンス係との関係)
- 第4・第5グループ合同会議(2部問題)
- 第1・第3グループ合同会議(図書運営協議会関係)
- 第2・第6グループ合同会議(AV機器関係)

新町読書室問題小委員会

開架コーナー分類統一小委員会

選書関係グループ

その他

合同委員会

上記の組織のもとに, 新図書館建築実行委員会を中心として, 「新図書館建設にむけて」の大目標を掲げ, ただ単に建築の問題だけではなく, 業務, 組織, 管理等の改善をふくめ, あらゆる改革の問題について, 図書館員全員をあげて研究し, 検討してきた。その間, 新図書館建築実行委員会開催回数は, 実に250回にわたり, その他グループ別討議, 専門小委員会, 合同グループ会議等の開催回数については, 枚挙にいとまがないほどであった。

<2> 設計者について

新しい建物を建てる場合, 基本設計者の影響力は, 非常に大きいと云える。換言すれば, 建物の良し悪しは, 実に基本設計者いかににもよると云える。したがって, 基本設計者の人選については, 図書館自体が積極的に意見を反映する必要があると判断した。

基本設計者の選定条件として, ①図書館の設計の専門家であること ②利用者の動線, 図書館の業務について理解があること ③創造的能力に秀れていること ④フレキシブルな性格の持主であること ⑤建築学会賞等の受賞者で, 秀れた業績をもっていること等が考えられる。こういった線で, 先ず基本設計者を選定したのであった。

実施設計については, 富家建築事務所があたるが, 基本設計の構想, 趣旨等を十分に理解してもらう必要があり, 同等にまた基本設計者にも, 実施設計は勿論, 完工に至るまで, 何らかの形で参加してもらう必要があった。したがって, 基本設計は, 基本設計者が主体となり, 実施設計は, 富家建築事務所が主体となるが, くさび型に, 相互関与のかたちで作業を進め, 相互にチェックをし, 連絡を密にし, 基本設計者と実施設計者との相互協力のかたちで, 新図書館の建設に着手したのであった。

<3> 正面玄関について

当時、同志社理事長は、新図書館の北側の線は、明徳館に揃え、南側を正式な玄関としたい意向であった。一方、大学側は、学生の動線からいって、当然、北側を正面玄関としたい意向であり、両者の意見が、くいちがって、相当難行したことがあった。位置的にみても、烏丸今出川角地付近で、一番眼につきやすい場所にあり、いわば、「同志社大学の顔」にも相当するということで、四方、どこからみても、正面のようなデザイン、意匠が、ほどこされているところに、この図書館の外観上の大きな特ちょうがあると思う。

<4> 書庫について

基本設計の素案では、書庫は下層（半地階および地階）に2層、上層（3階）に1層を設け、この間に資料群と関係の深い1階・2階の諸室をはさみこむことにより、資料群とこれを利用する室群との関係を断面的に密接にすることを意図し、変形サンドイッチ方式がとられた。しかも、最下層の書庫は、エレコンパック方式が想定されていた。

特に、図書館側が懸念を感じたのは、書庫を地階にもってくることによって、湿気、水もれなどの危険がないかということであった。現に、会館の地下は、地平面より3.2mの深さで、地下の下に防護壁を設けて、防水を施しているが、過去、集中豪雨の際、地下コンクリートの割れ目から約30cmの浸水があり、排水ポンプも学内にあるが、停電の場合は、作動しなかったときいていたからである。

したがって、設計者内部で、技術的に完全に保証できるまで、種々の観点から検討され、地平面よりの深さ等をも併せて慎重に配慮されたときいている。

また、エレコンパック方式については、現状の機械設備では、エレコンパック式書架が開閉するまでに相当な時間がかかる弱点もあり、種々検討した結果、見あわせることとなった。

しかし、書庫がサンドイッチ方式になっていることは、この図書館のユニークな点であろう。また、上層の書庫中の北西部分は、将来開架閲覧方式を導入することもできるように階高を他の書庫部分よりも高く考慮されている。

<5> 開架閲覧室について

文部省管理局教育施設部大学図書館施設計画要項によれば、「閲覧者が、図書館資料をできるだけ利用しやすくするため前からは開架形式が望ましい。図書館利用をおくうにさせるという原因のひとつは、閉架であるために、直接、資料の内容を知ることができず、また借出手続がめんどうで時間がかかるということにある。事実開架形式を採用したために図書館利用者が激増したという例が多い。しかし、閲覧者の数が非常に多い場合には、開架形式は、管理上の困難さを増すので、その採用にも限度があり、学部学生を対象とする場合、開架冊数の範囲は5万冊以内と考えられる。」とあるが、これにもとずいて、新図書館では、開架閲覧室に主要なスペースが割り当てられており、圖書の収容力も最大限5万冊となっている。

<6> 基本設計案の縮小について

新図書館の建設地が、第一種風致地区で美観地区でもあり、御所の北側に面していることもあって、高さについての厳しい制限があったことと、建設予算的にも最終段階で、大きな制約があったこと等により、数回にわたって当初の基本設計案を変更して、全般的に縮少せざるをえなかった。しかし、基本設計にもらわれている趣旨、内容は、たとえ、縮少されても、あくまでもつらぬいたのであった。

その結果、当初、基本設計案では、地上4階、地下2階であったが、4階部分を全部削除し、次いで3階部分を全部未仕上げとした。4階には、情報管理室も予定されていて、検索用コンピューター等によって情報管理機能の効率化、高度化をはかることが考えられ、大学図書館相互間の協力を進めるために、テレックスなどのコミュニケーション設備をもつことが考えられていたが、いずれも、やむをえざる事情で、みあわせることとなった。しかし、将来のことを考えて、2階のAV室付近には、コンピューター用の配線、配管がされており、必要に応じて、コンピューター等の本体を配置すれば、作用しうるように配慮されている。

以上、新図書館建設にいたるまでの幾つかの事情について述べてきたが、その間、いうにいわれぬ幾多の困難があったが、それを乗り越えて、「幻の図書館」といわれたものが「実在の図書館」として、立派に建設されたことは、学生諸君、教職員各位の暖かきご支援、ご協力の賜物であるとともに、「見えざる御手による神の導き」によるものと確信するものである。

あとがき

“びぶりおてか” 15号をお届けします。

多くの方々のご支援、ご努力によって新しい草袋が出来ました。新しい酒がこれからの課題となるでしょう。ご鞭撻をお願いする次第です。カットも再び住谷先生のお手をわずらわせました。ありがとうございました。

なお本号は「同志社大学図書館の歴史」等継続記事は休載しました。

“びぶりおてか” 同志社大学図書館報 No. 15 1974年2月1日 発行

発行 同志社大学図書館 京都市上京区今出川通烏丸東入 電話 211-2311

編集責任者 楠 見 愼 伸